

リング

増山優

ふとリングに目をやる。
誇らしげなメダル色をしている。
なのにリングの周りをみてごらん。
指はハゲた銅の一部に侵食され、
緑に変色した
プールサイドのゴム床の色みたいな、そんな色
ガツンガツンと鉋物を削り出す音
ズドンと集積袋を荷台に下ろす音
欲なんてみじんもなく
まるで縫製工場のフィルムに出てくる
女工かのような規則正しい手さばきで
じいさんはこぶだらけの分厚い掌で
堅く鑿を握り締め、
一心不乱に彫金する
熱中症だの筋肉痛などはこれぼちも憂慮しない。
それをつけて誰が誰と愛を交えただの夢想だにしない。
ただ淡々と彫金する
いずれ誰かのもとに届くと知りながら。
幸せ、それでいて軽々しい繕いの一端を担う
だがそれはいずれ錆びる
そこには何か不足している
そこには目には見えない 何か がある
忘れてはならない「リンク」がある。